安房中学の勤労動員　～『学徒勤労動員日記 1945 年』から

西村榮雄　（女性の日記から学ぶ会）

聴き手:愛沢伸雄（NPO法人安房文化遺産フォーラム代表）

愛沢：「戦後 70 年」ということで証言の会を行いたいと思います。館山は世界史的にどんな場所であるかを考えるときがあります。それは第２次大戦終結に関わるミズーリ号降伏調印の翌日、館山に米占領軍本隊が上陸し戦後日本のスタートの地になっているからです。これまで国会図書館や公文書館、あるいは防衛研究所戦史資料室にある米占領軍やＧＨＱ、陸海軍の資料にあたってきました。最近、見つけた資料では、明治期に海軍の軍艦が大砲の射撃訓練を館山湾でやっていたことがわかり、地域から世界史的な日露戦争の姿を見ることができます。

なぜ、この話をしたかといいますと、西村榮雄さんと知り合って、たとえば館山がどんな場所であったかを考えていくうえで、戦時中の人的なネットワークを知ることができました。西村さんのお父さんと関係をもっていた方には、日本の戦前戦後の歩みに深く関わり、とくに軍事的に重要な役割を担った方でした。実は廻り廻って戦争を終わらせるために、館山がある役割を果たしたのではないかとも考えられます。なぜ米占領軍が直接軍政をわずか４日間ですが、館山でおこなったか、それらのことも軍事戦略的に重要な地域であっただけではなく、クーデター未遂事件があったり、人的なネットワークにおいて注目することがあったからではないかと推察しています。米占領軍は館山で軍事的な占領をスムースにさせ、モデル的な占領政策を意図していたのかもしれません。ただ、よくわからないことだらけで推測ですので、さまざまな証言をいただき、今後とも資料を探し出して解明していきたいと思っています。

さて、お話ししていただく西村さんは戦時中、千葉県立安房中学校に在学中に体験した学徒勤労動員の一部を『日記』に残しています。戦争末期に軍人から日記を燃やせという命令で、ほとんどの生徒が燃したなかで、西村さんの『日記』だけ一冊残ったのです。それはなぜか、家族ぐるみで館山から山口県に引っ越ししたからでした。『安房高校創立 100 年史』のなかに、西村さんの『日記』を紹介するとともに西村さんの一文が掲載されています。今日の資料に入っています。

なお、西村さんのお父さんである西村迪雄（みちお）さんと陸軍大将多田駿（はやお）さんは、軍事的に重要な人物ですが、実はお知り合いで近所に住むことになったのです。２人とも戦後すぐに亡くなっていますが、戦争を終わらすことや戦後のスタートを考える時に、この２人とともに、参謀総長でミズーリ号での降伏調印式に出席した梅津美治郎とも知り合いであったことは、何か示唆するものを感じます。戦争を終わらすために、館山の地で何らかの連携があったのではないかと推察しています。多田駿陸軍大将や西村迪雄陸軍少将らは、東条英機の軍事政策に反対していたグループであり、梅津美治郎とともに陸軍士官学校第 15 期の仲間でした。ほとんど資料がないなかで、西村さんは子どもながらにお父さんを通じて多田駿大将と接していますし、あるいは館山の船形にはかつて河野恒吉という日本の軍縮を進めようとした軍人がいて、西村や多田にとって陸軍士官学校の先輩であるだけでなく反東条派でした。館山がそのような発信をしていた地とするならば、戦争を終わらす契機をつくった可能性もあるのではないかと推察しています。まったく資料もないのでわかりませんが。

ではさっそく西村さんの証言を伺いたいのですが、その前に船形のどの辺にお宅があったのでしょうか。

愛沢：向こうに山があり、お寺がありますね。

西村：常光寺ですね。船形駅から数百ｍ千葉方面にむかって線路が切り割りになっている手間の右手のすぐで、ちょっと小高い畑になって、そこに平屋がありました。

愛沢：もう一人関係していた多田駿さんのお宅は、尾根がちょっと続いていて、あの家の向こう側

で、山の下になりますね。

西村：そうですね、山の下や家屋はかつて船形陣屋があったそうです。その陣屋跡のちょっと外れて、御霊神社があります。

愛沢：西村さんのお父さん西村迪雄さんの写真を那古史から見つけました。こちらが多田駿陸軍大将。西村さんのお父さんは陸軍少将、ともに陸

西村迪雄

多田 駿

軍士官学校 15 期でした。同期には大将になった梅津美治郎という人物もいます。大佐では有名な河本大作がいます。皆さん河本大作は知っていますか。実は多田駿の奥さんの兄であり、陸士 15 期の同窓生で、張作霖爆破事件を起こした人物でした。

多田大将の略歴を見ますと中国にいて、当時の中国戦線の中枢部にいた人です。そこで知ってもらいたいのは、軍事政策において東条英機とぶつかったのは多田駿大将でした。多田にとって東条は陸軍士官学校 17 期で、2 期下でした。東条は陸士 17 期のグループを固めて、中国戦線の拡大にもっていきました。多田駿はどちらかというともう戦線を拡げない方が良いという政策を志向していたので、結局、東条から外されてしまいます。本当は多田駿が陸軍大臣やるはずでしたが、政治的に東条に追い落とされたといわれます。多田駿が予備役になって、船形にいたという訳です。それは西村さんのお父さんとの関係があって、船形に来ていたということです。戦争の最後は船形で迎えていますが、終戦後すぐ亡くなっています。西村さんは多田大将と出会っていたということですが、当時は何年生でしたか。

西村：中学の１、２年生の頃でした。

愛沢：一緒にお話をしたり、ともに行動をしたという貴重な体験をされています。また、安房中学校の在学中、戦争が激しくなった頃ですが、勤労動員に関わっています。その辺からお話をよろしくお願いいたします。

西村：「戦後 70 年」証言の会ということで、資料に私の経歴と少年時代のことがあります。私の父は陸軍の軍人で近衛野砲連隊の連隊長をしていましたが、当時の上官と上手くいかない。代々、うちの先祖は上官と喧嘩する気質があるようです。

祖父もそれで陸軍を追われていますし、父は東条英機に反発して朝鮮の鎮海要塞司令官に左遷され、予備役に編入されています。

東條英機

1905年（明治38年）3月に陸軍士官学校を卒業（17期生）。1911年（明治44年）と陸軍大学校（陸大）に挑戦して失敗。東条のために小畑敏四郎の家の二階で勉強会が開かれ、永田鉄山、岡村寧次が集まった。1912年（大正元年）に陸大に入学し、に陸大を卒業。

多田駿さんとは陸士の同期です。昭和 12 年の７月７日に日中戦争が始まった頃は、小学校２年生でした。その前に盧溝橋事件があり、日本軍が演習しているところに、中国の兵隊が発砲してきたということで戦争になるわけです。

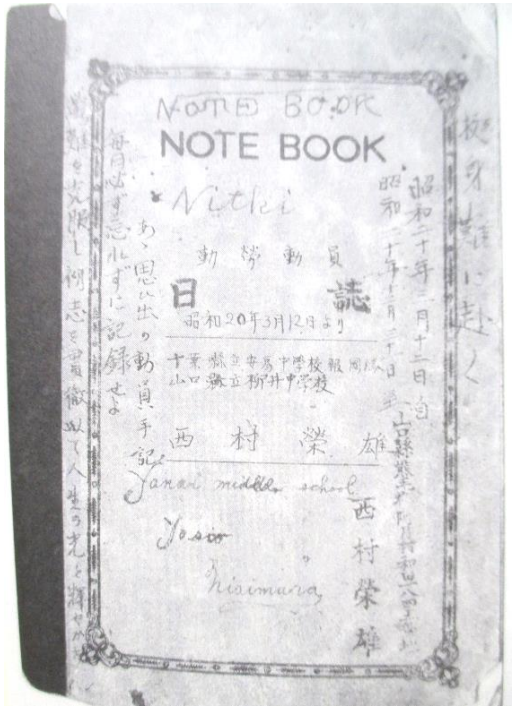
その時、多田さんは和平派として交渉で戦争をとめようという派であり、東条英機のように「けしからん、もう徹底的にやっつけてしまえ」という派とは違っていました。東条は自分の意見に反対するものは、どんどん陸軍から追い出すわけで、予備役とかに編入させてしまって、自分のいうことを聞くものだけを集めていた訳です。それが幸いしたかどうかわかりませんが、父も陸軍を追われて、終戦の時には辞めていました。多田さんも陸軍大将までなり、陸軍大臣の候補でしたが、実現しなかったということです。結局、戦争犯罪人として巣鴨に召喚され、その後、胃癌になって昭和 23 年に釈放されたものの、すぐに亡くなっています。

多田大将については、今でも記憶に残っていることがあります。うちの親父は釣り好きで、多田さんも釣りが好きでした。親父が釣りに行かなかった時があり、何か用があったので、私は父

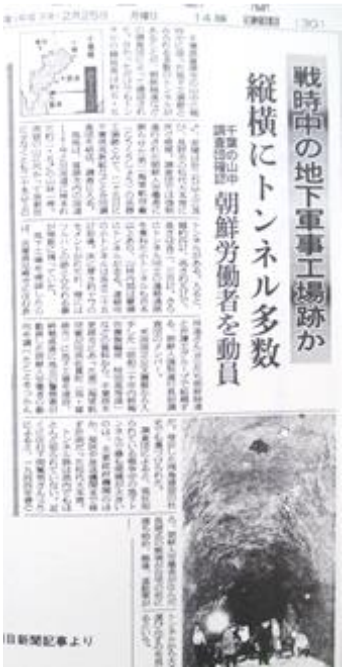
に代わって多田さんから釣りに行こうと誘われ、中学の１、２年生の頃ですが、和田の南三原方面に釣りに行ったことがあります。父と多田さんは、父が釣りから帰ると多田さん宅に獲物を届けたり、多田さんから我が家へ持ってくるという間柄でした。

それともう一つが、先日、愛沢先生のご紹介により、多田大将のお孫さんにお会いし、いろいろなお話をしました。私の『学徒勤労動員日記』の書き出しは、昭和 20 年３月 12 日に「朝９時の汽車にて学校に行き」と書いてあります。実は多田さんのお孫さんから、その時期に書いていた多田さんの日記の写しを見せていただき、３月 12 日の日記の欄には、「西村の長男学徒動員にて今日より木更津に行くとの挨拶に来る」と書いてあり、とてもビックリしました。当時の私は、それどころじゃなく、挨拶に行ったのかもしれませんが、多田さんに会った記憶が全然ないのです。

ついでに父や多田さんの同期生の一人に梅津美治郎という方がいます。同じ陸士の 15 期でも非常に優秀な人物で、恩賜の金時計ではないですが、恩賜の軍刀を貰ったといいます。結局、最後はミズーリ号で降伏文書に調印しています。



次に『学徒勤労動員日記』のことです。私からみると非常にお粗末で、小学生の日記みたいな内容です。ではどうして日記を書いたかといいますと、勤労動員になった時に、同じ部屋にいた８人が一緒に日記を書くことになりノートに日記を書き始めたのです。毎日、仕事終わってから、部屋で皆が車座になって日記を書きました。ところが、私は山口県の方へ転校することになり、７月に日記を持って山口の方へ行った訳です。後から聞くと、終戦の時に木更津の第二海軍航空廠の軍人が来て「日記を書いているのは全部出せ」とか、「作業日誌から個人の日誌も全部提出しろ」とされ、すべて日記は集められガソリンをかけ、燃されたというのです。何年か経ちまして、朝日新聞に今の佐貫町の近くですが、空襲が激しくなって、地上ではとても駄目となり、地下トンネルを掘って地下工場をつくったという記事がでました。今でもありますが、ちょっと入れません。そこに地下壕を掘って、旋盤やフライス盤などの機械を運び込んで作業をしていたのです。木更津の第二海軍航空廠は、零戦のエンジンの修理工場をもち、日本で一番大きな工場であったと聞いています。戦地から来た零戦のエンジンを外して、木更津に持って来て、地下工場で学生たちが分解や組立をし、整備されたエンジンをまた零戦に搭載し、戦地に行くようなことになっていたといいます。その頃、私はまだ 15 歳でしたから「お国のために」といってとても一生懸命働


戦時中の地下軍事工場跡か
縦横にトンネル多数
朝鮮労働者を動員
旧新聞記事より

(29) 朝日新聞 12版 1991年(平成3年)3月20日 水曜日
地下工場入り口の前に並んだ第二海軍航空廠兵器部の作業員たち。後列に女学生。1945年月16日撮影という ＝木本哲さん提供
動員女学生 油まみれの青春
46年前、銃後の日々 今も鮮明に
地下工場

きました。

今、問題になっている百田尚樹さんの『永遠のゼロ』を読んでいたら、零戦というのは非常に優秀な飛行機だったらしいが、それまでの零戦とはちょっと性能が落ちるのは、聞くところによると女性や中学生が零戦を修理しているからだと書いてあり、なるほどと思いました。当時は、一緒に張り切ってやっていましたが。

平成３年２月 25 日付の朝日新聞に、地下工場の跡があったという記事がでました。当然のことながら我々はもう知っている訳です。働いていましたから。でも、地下工場には朝鮮から強制連行されて来た朝鮮人の方々が掘っていたということです。在日の朝鮮人の方々が調査団をつくって、調査活動に入りました。木更津には六軒町という町があり、いわゆる従軍慰安婦の慰安所が６軒あったとも聞いています。銚子あたりの慰安所から木更津に連れて来られた朝鮮人や日本人がいたとのことです。６軒の慰安所があったので六軒町といっていたらしいですが、女性団体も調査に入りました。同時に木更津の栗原先生たちが中心になって、中学生たちが働いていたが、どういう作業であったかを調査していました。

そのなかで木更津高等女学校では田宮さんが終戦後になって書かれた絵日記が何十枚と出てきたというのです。中学生の方は、先ほどいいましたように、日記の類はすべて焼かれましたが、誰かが私が日記を持っていると知らせたようです。私としては、非常に幼稚な記述で、あまり気が進まなかったですが、内容的に「今日はリヤカーでセメント袋を運んだ」とか、作業内容が貴重なものであり、「日記は一日一日書いてあるから非常に貴重なものだ」と「是非、本にしなさい」といわれ自費出版したわけです。結構、全国から譲ってほしいといわれて、今では本がなくなってしまいました。その後、『安房高創立 100 年史』に掲載との話があり、載せていただきました。

私は昭和５年１月 20 日に生まれで、７年に朝鮮に渡って、また戻っています。この時に上の兄が２人、姉が１人がもう学校へ上がっていたのですが、病気や事故で亡くなりました。それで父は東京にいるのが嫌になって、船形に家を建てて引っ越して来たといいます。

先ほど河野恒吉という元陸軍少将のことをいいましたが、船形にある「どんどん橋」の近くに住んでいました。おそらくその方が父を呼んだのではないかと思います。この方も反東条派であり、家に遊びに来ては、父と酒を飲んでいました。私はよく抱きつかれ、ニンニク臭い酒の息を吐きかけられ、随分と往生したものです。この方が酔っ払うと「東条の奴をピストルでぶち殺してやる」とデッカイ声で怒鳴っていました。当時、こんなところを憲兵隊に見つかったら大変で、そういうことが平気な人物でした。

ある時、お孫さんが産まれ、私の家から赤ん坊を抱いて帰ったとき、どんどん川に架かる欄干のない石橋から抱いたまま落ちたというのです。多分、河野さんは赤ん坊に怪我させないようにかばって奇跡的に助けたというのです。後に河野さんは上下２冊『国史の最黒点』という本を出しますが、はしがきに安房の地において不慮の事故を受けたと書いてあります。まさしく身をもって赤ん坊を助けた事故を指しています。

私は昭和 11 年に船形尋常小学校に入り、その後昭和 16 年に戦争が始まり、翌年に千葉県立安房中学校に入学しました。ここに私の船形国民学校卒業証書があります。国民学校という名称は昭和 16 年から５、６年呼ばれていますが、また小学校に戻っています。中学に入ると、戦時中であっても１、２年生の時は授業をやっていました。３年生になると、もうほとんど授業はありませんでした。要するに学校の机で勉強することも勤労奉仕をするのも同じだという考え方になっていました。戦争が激しくなってくると、今度はそれどころではなくなり、学徒も戦力の一翼を担えということで、学徒勤労動員になっていきました。

木更津に行かされる前にも、授業をやめて各地に勤労動員に行かされています。館山航空隊（「館空」）や洲ノ埼航空隊（「洲ノ空」）に勤労動員で行っています、昭和 18 年にできた「洲ノ空」ではモッコによる運搬作業でした。今でしたらショベルカーですが、当時はそんなものないですから、中学生が２人１組になって、地下壕から

掘り出した土砂をモッコに入れ運び出す作業でした。私は背が低いから結構、キツく、後ろに背が高い友だちがいると負担がかかります。赤山の地下壕や 128 高地の地下壕を見学にいきましたが、私も記憶がはっきりしませんで、同級生に聞いたら、「ありゃあ、洲ノ埼航空隊の方だよ」というわけで、私は今の自動車学校のそばにある地下壕を掘った土砂をモッコで運び出す作業をし、その友だちはその土砂をトロッコに積んで「洲ノ空」の方へ運んだということです。おそらく造成の地ならしをやっていたのではないかと思います。

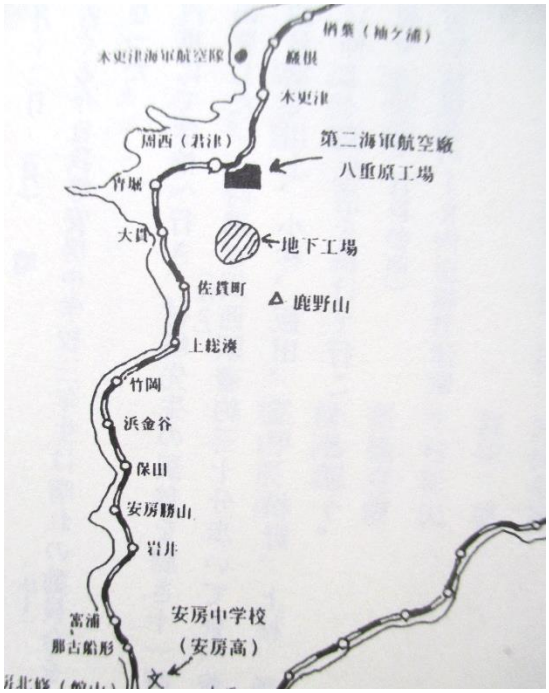
その他、掩体壕のことでは、今残っているコンクリート製の立派なものを造った記憶はないのですが、「館空」の周りに木と土をつかって土塁のような簡単な掩体壕を造りました。昭和 16 年に開校した館山砲術学校では、高角砲陣地や付設する道路工事に行かされ、上陸用舟艇や山岡部隊の基地があった富浦の海岸では、水陸両用戦車部隊の基地づくりに動員されました。また、岩井海岸北側に燃料のドラム缶が入った地下壕があり、そこでの燃料入りドラム缶の運搬作業があり、中学生にはちょっとキツイ作業でした。

それから九重地区には塹壕づくりがあり、当時の雰囲気として米軍が千葉県の九十九里海岸とか、あるいは相模湾に上陸して来ることを想定していたようです。私たち中学生は米軍が上陸した時に対応するため、竹やりで中学生１人が米兵１人を殺せばよいといわれていました。その時のため戦車を攻撃すると称し、先生が戦車に見立てたリヤカーを押してきて、中学生２人が丸太を抱えてほふく前進し、リヤカーの下に投げ込む軍事訓練をしました。当時は、皆真剣でしたが、後から考えても馬鹿みたいな話でした。

それから夜６時から私たちは船形の港に集合させられ、他の者は北条の桟橋であったと聞いていますが、ウミホタル採集ということがありました。これは魚屋さんからハラワタとか魚の頭を貰ってきて、それを布に包み糸つけて、桟橋から垂らしてウミホタルをとったのです。一杯ウミホタルが付いた包みをバケツに入れて運びました。それについて調べていた静岡大学の先生が直接、当時の話を聞きたいとのことでしたので、協力しました。当時、軍はウミホタルの軍事研究をするためにウミホタルを採集していた記事が朝日新聞（平成 10 年８月 31 日付）に掲載されたことがありました。

その他、那古あたりの暗渠（あんきょ）排水という土木作業があり、これは食料増産のための土地改良であり、田んぼの中に竹を巻いた束みたいものを入れていく工事でした。また、富浦の海岸での松の根から松根油を取るために松を切り倒してあり、その松の根だけを掘り起こすのです。中学生が５人１組ぐらいになって松の根を掘る作業はとても大変でした。私は背が低くて小さい方だったので大変な苦労でした。さらに炭焼きをして炭俵に詰めた炭を学校まで運ぶ作業です。これが１人２俵を運ばなければならず、自転車の荷台に２俵積んでフラフラし学校まで運び、終わった時はホッとしました。

そのうちに昭和 19 年になり、７月７日にはサイパン島玉砕、７月 18 日に東条内閣の総辞職となり、11 月 24 日には B29 による東京への空襲が始まるわけです。それから空襲、空襲と大変になっていきます。翌年の３月 10 日の東京大空襲では下町がほとんど廃墟と化してしまい、その２日後に私たちは、木更津の第二海軍航空廠の方への勤労動員になるわけです。



ですから、当時 15 歳でしたが、軍事訓練などもあって、結構、深刻な状況でした。いつアメリカが上陸してくるか、もう上陸して来るぞということで、我々はどういう死に方するのだろうか、戦車に潰されて死ぬのだろうか、刀で切られて死ぬのだろうか、鉄砲で撃たれるのだろうか、あるいは爆弾で吹き飛ばされるのか、そのようなことを深刻に考えていました。

ところが、３月 26 日にアメリカ軍が沖縄に上陸した時には正直いいまして、皆ホッとしたのです。「ああ、沖縄に行ったか。千葉でなくて良かった」と。沖縄が悲惨な目に合ったなかで、そのような言葉はとても不謹慎ですが、一歩間違えば私たちが皆殺しに合ったような状況だった

でしょう。ですから、何年か経ってから私は沖縄旅行に行ったとき、ひめゆり学徒たちの最後の地下壕がありましたが、あそこは、同級生ですから涙が出て、どうしても入れなかったですね。年代の違う人たちは、平気で入っていきますが、私だけはどうしてもあの中へ入ることがなく、外で涙を流していました。

それから、千葉の八千代市に「女性の日記から学ぶ会」というものがあります。そこでいろいろな昔の日記をこう読んで、グループで話合う会です。その中に５、６人の大学院生の皆さんが、西村がもう80過ぎているから今のうちに聞いておこうと、私の日記を取りあげてくれました。私ともう１人女性の方を入れて２人が並んで、会員の皆さんから質問形式で「戦時下の暮らし」についてお話しました。この本を読んだ感想やわからないところを出してもらいましたが、若い方が今読むと、もうわからないことだらけで、大体 B29 とは何ですかと質問があったりする。わからないところがあると、すぐに大学の研究室に行って調べ上げてきます。私が話したことで、それはおかしいのではないかなと年配者から質問されることもあります。

そのなかで私もビックリしたのは、小学校の時に船形での体験ですが、船形から出征兵士が出ると小学生全員は日の丸の小旗を持って、船形の駅へ見送りに行きます。そこで「天に代わりて不義を討つ」と歌を歌って送り出すわけです。太鼓をドンドンと吹奏楽などをして「バンザーイ、バンザーイ」とやりました。

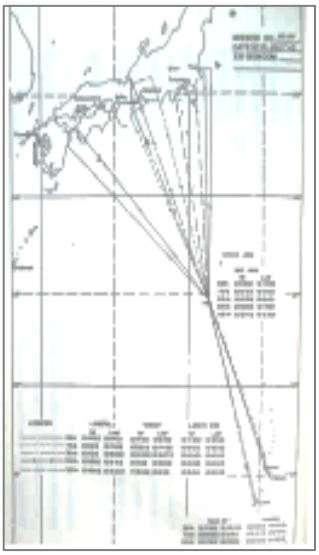
その話の後で質問受けた一つに、「私たちの時はそんなことやらなかった」との話で、逆に「そういうことするな」となり、「自宅の前で私の父は出征していきました」といいます。それを調べてくれたら、確かに中国との戦争している時はそうでしたが、昭和 16 年 12 月８日にアメリカと戦争になる前、６月頃からは日本全国に大量の召集令状を出して兵隊を集めます。それがスパイに通報されるとマズということで、軍の方から出征兵士の見送りはこっそりやれ、派手にやるなとのお達しが出ているらしいのです。それまでは日の丸の小旗とか大幟を立ててね、祝出征何々君とかっていうのを駅に持っていきました。それが一切もうそのようなことをするなとお達しが出たようで、知らなかったことです。

私が小学生の時の遊びを話しました。当時、テレビはありませんし、ラジオのある家庭もあまりない時期、男子の遊びだとビー玉やメンコ、ベイゴマ、戦争ごっこ程度でした。今でもゴトウをやっていますか。やってないでしょうね。ゴトウを知っていますか。私の小学校の時には、小学校前の文房具屋さんにゴトウ箱が売っていました。それにゴトウを入れて、松の木にいるのは強いとか、正木のゴトウはどうだとか、ゴトウを集めては学校で喧嘩させていたのです。それも先生が一緒になってやっている状況でした。そうしましたら、さすがに大学生です。研究室行って写真を撮って来ました。学名はネコハエトリグモといい、場所によってカネコといっているものを私たちはゴトウと呼んでいました。

ところで、私は安房中から７月 28 日に山口県の柳井市に転居しましたが、ここは父の本籍地でした。８月に山口県立の柳井中学校に転校しました。そこでも光の海軍工廠に勤労動員されるのですが、私は転校生ですから、まず学校に慣れろということで校庭の芋掘りをしていたわけです。それで８月 14 日です。終戦の前の日に光の海軍工廠が B29 の大編隊による爆撃を受けて、同級生は２人死んでいます。もう１日、早く終われば良かったのですが。今年の８月にも慰霊祭をおこなうと聞いています。

それから那古地区川崎の空襲ですが、昭和 20 年５月 19 日に B29 による空襲があった時、私はもう木更津の方へ勤労動員に行っていました。その日のことは分からないですが。私の日記に書いてあり、その後帰省した際に空襲跡を見に行っているのです。大体、勤労動員でも土曜日曜は家に帰って良い時と、帰っていけない時とがありました。日記では５月 27 日のところに、「午前中北条へ行き、買い物をする。途中川崎の爆弾の跡を見てきた」と。それで資料に「５月 19 日に館山市川崎に爆弾が投下され、物理の金子先生宅が破壊、夫人が爆死された」と記載されています。

愛沢：この部分は私からお話します。この間、那古の川崎に西村さんと一緒に、金子先生の奥さんが亡くなったと思われる場所にいってきました。５月 19 日の爆撃があった場所を 27 日に訪れています。多分、片付けられていたかもしれませんが、空爆の痕跡は激しかったでしょう。資料の地図に亡くなった方の名前と場所が書いてあります。この間、西村さんは金子先生の奥さんが亡くなった場所に初めて行って、その場所を確認しました。



西村：そうですね。

愛沢：金子先生は安房中で何を教えていましたか。
西村：物理の先生です。
愛沢：ご夫婦で住んでいた場所は鈴木さんというお宅でした。資料に鈴木さんの証言がありますが、昭和20年当時、国民学校6年生とのことです。鈴木さんのお宅に間借りしていたのが金子先生夫妻でした。鈴木さんは「私の家は当時安房高の先生夫妻が下宿していた。爆撃で奥さんが即死であった」と書いています。

もう一つアメリカの資料があります。この資料によると作戦任務1785では、東京の立川周辺への空爆で、第4空航空団の内、309機が19日10時51分から10時58分まで目標に爆弾を落としたようです。その時に天候状態が悪いと事前に投下目標を変えてあり、それを臨機目標といっていたようですが、さらに天候が悪いとレーダーで爆弾を落とした場合があったようです。この時、14機が臨機目標に移したとあり神奈川、千葉、山梨、静岡の各地に投弾したと記載され、その1機が千葉となっています。

第20軍航空軍日本本土爆撃詳報という資料があり、そのなかに目標規定61の2421010という館山の軍需工場があり、どうも「株式会社池貝鐵工所館山工場」と思われます。

株式会社池貝という会社は、明治22年に現在鋸南町佐久間出身の池貝庄太郎が創立した日本を代表する工作機械の製造会社です。池貝1号旋盤いう非常に優秀なものや、国産石油エンジンでも焼玉エンジンの開発に成功しトップメーカーでした。昭和18年に館山工場を誘致し八幡海岸に軍需工場が作られ、砲弾用の強力な旋盤や航空機エンジン「誉」製造する工作機械をつくっていました。日本のトップメーカー池貝鉄工所の館山工場が最新の工場だったということは、アメリカも知っていたと思うので目標にしたと思います。川崎は平久里川の隣ですし、工場の敷地は凄く広いので目視できたら確実に落ちる場所だったと思います。聞くところによると、爆弾の1個は平久里川の河原そばの敷地内に落ちたとのことです。

B29の14機のうち1機は、優先順位3番目の臨機目標で、落とす必要もなかったといえます。アメリカ側の資料によると攻撃時刻は日本時間10時55分に高度7,220mから高性能爆弾250kg27発、合計7トン落としたと記録されています。

加藤誠さんの証言では「私の家では母が即死、祖母と当時数えで22歳の姉が西行寺に収容され」、3人が亡くなっています。お父さんも入院半年し、家に戻って来たということです。加藤さんは安房農業学校に在学していましたが、残った家族のため家で働くことを決め学校をやめました。その後、大変なご苦労があったとのことです。那古の川崎町内会では安房堂に慰霊碑があるので、9月に慰霊祭をおこなっているとのことです。

西村：空襲につきまして、川崎に見に行ったのは覚えていますが、どういう状況だったかまでは記憶にありません。その前に洲空に勤労動員に行ったときにB29の空襲を受け防空壕に入りました。B29が爆弾落とした時は凄く、防空壕に入っていても頭の上に落ちたかと思うほどの凄い振動で。土砂がワァッと崩れるのではないかと思うほどでした。終わって壕から出てみると200～300m先に爆弾が落ち、すり鉢状の噴火口のようになって周りが吹き飛んで、「凄いなぁ」と思った記憶があります。木更津に行った時には艦載機の機銃掃射も受けて、幸い命拾いしました。

私の学徒勤労動員の日記については、平成19年10月から12月まで、立命館大学が主催した姫路市にある平和資料館において、全国の勤労動員「学びを奪った戦争」というテーマにより私の現物の日記や写真のコーナーを作っていただき展示されました。

質問：一つだけ、学徒勤労動員で船形に行ったり九重に行ったり、あるいは炭焼きの時に自転車で運んだというのがありましたが、移動するのは全体が自転車で行ったのですか。
西村：自転車の人は全部、行かされました。
質問：自転車がない人は歩いて行ったのですか。
西村：いや、炭運びは行きませんでした。しかし、

動員はすべての生徒が行きました。

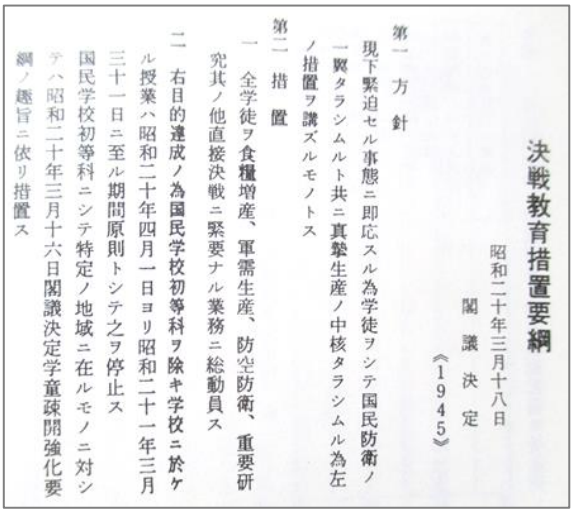
質問：たとえば動員は歩いて行ったのですか。岩井の方はどうしましたか。

西村：岩井は当時、汽車でした。汽車で行ってどこどこに何時に集合となっていました。

学徒勤労動員については、報奨金というのがあって、お金を払われたとのことです。私は転校したから、後に先生から山口に 130 円 2 銭を送ってきました。働いている時は、このようなことは知りませんでした。その中にウミホタルの報酬が 4 円 59 銭となっていると、先生の書付にありました。報奨金という形で払っていたようです。

質問：学校生活や苦労したことはありますか。

西村：私は小学校ではちょっと級長やっていましたので、授業の始まる前、教壇の下に行って「国本に培い国力を養い」というと皆が一斉に声をあげます。授業が終わると今度は教育勅語を語る「朕惟フニ」ですか、「我が皇祖皇宗」とすべ諳んじて、それでないと一日が終わらなかったわけです。勤労動員の時は、物凄く、「お国のために尽くす」と張り切っていました。子ども 6 人の家族で、家にいると親父に怒られてばっかりでしたので、学校は嫌だとか苦痛だというのはなかったですね。今度、寮に入れれば親父と縁が切れることを楽しみにしていたようなところがありました。昭和 18 年に学徒戦時動員体制確立要綱で決定され、19 年には決戦非常措置要綱で決定されたわけです。それで動員令が出て、第二海軍航空廠に赴くことになって、15 歳の少年ですからいたずらばかりしていました。



決戦教育措置要綱

昭和二十年三月十八日
閣議決定
《1945》

第一　方針

現下緊迫セル事態ニ即応スル為学徒ヲシテ国民防衛ノ一翼タラシムルト共ニ真摯生産ノ中核タラシムル為左ノ措置ヲ講ズルモノトス

第二　措置

一　全学徒ヲ食糧増産、軍需生産、防空防衛、重要研究其ノ他直接決戦ニ緊要ナル業務ニ総動員ス

二　右目的達成ノ為国民学校初等科ヲ除キ学校ニ於ケル授業ハ昭和二十年四月一日ヨリ昭和二十一年三月三十一日ニ至ル期間原則トシテ之ヲ停止ス

国民学校初等科ニシテ特定ノ地域ニ在ルモノニ対シテハ昭和二十年三月十六日閣議決定学童疎開強化要綱ノ趣旨ニ依リ措置ス

この日記を読んだある女性の方が「あなたの日記読んだら、食べ物の事が一杯出てくる」というので数えたところ、食べ物のことが 30 数回出てくるように、お腹を減らしていました。お腹は減っていましたが、苦痛という感じはなかったです。結局、高射砲を撃つと、破片が船形の山の辺に落ちるので親父はここが危ないからといって、親父の実家の山口に疎開することになったのです。何か寂しい気もしましたけど、向こうへ行っても広島に原爆が落ちる 1 週間ぐらい前に広島を通っています。引越しは当時とても大変で、荷物が出せなかったので、切符を手に入れて手荷物は 1 日何個と決まっていました。行く途中では艦載機による機銃掃射された列車があるとかで、東京駅の暗闇のなか一家 8 人で夜を明かしたものです。次の朝、いよいよ汽車に乗れると乗った途端に今度は「全部降りろ」というのです。それは軍隊の兵士を乗せるから「全部降りろ」というので降ろされ、次の汽車を待って大阪にいっても、途中で降ろされ、岡山でも岩国でも降ろされ、次の朝にやっと山口にたどり着くように移動の苦労は大変でした。

質問：日記にある 5 月 6 日のことをお聞かせください。

西村：5 月 6 日の夜、酒井中尉殿が娯楽室へ蓄音機を持って来られ、シューベルト「未完成交響曲」とベートーベン「月光」を聞かせてくれました。これは非常に我々にとっては不思議な感じでした。というのは、もちろん中学生ですから、流行歌なんか歌うのは禁止され、軍歌がほとんどです。ジャズなんかはもっての外です。そんな中で、海軍の軍人がわざわざ休憩室へ蓄音機を持って来て、「未完成」を聞かせてくれたので、あの人たちは凄い人たちだなぁと思っていたら、友人にいわせると、「いや、あれはドイツの作曲家だよ」。ドイツとイタリアと日本は三国同盟を結んでいたので、敵ではないのでドイツの音楽家のクラシックだから、聴いても良かったといいます。「そうかなぁ」と思ったのですが、これについても大学院の学生が調べて来ました。

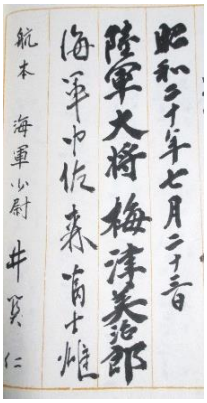
質問：戦争についてどう思っていましたか。

西村：日清戦争や日露戦争とか、戦争が付くものは天皇の詔勅が出るわけで、宣戦布告があります。ところが、満州事変というのは戦争といいません。満州事変は結局、天皇陛下の詔で戦争を始めるわけにはいかないので、張作霖の爆破事件みたいもの、結局日本人がやったのですが、それを理由として兵隊を繰り出し占領してしまいます。支那事変についても盧溝橋で敵が発砲してきたといいますが、あれもいろいろな説があり何かハッキリしないですね。だから天皇の詔勅が出ないのに陸軍が勝手に行動を起こしてしまう、その最たるものが東条英機だったのではないでしょうか。結構、軍部の中で和平派とか、積極派とか、その前にも 2・26 事件もありますが、そういう派閥みたいなものが結局、アメリカ取るに足らずとか、万世一系の天皇が治める日本は神の国であると。歴史を見ろと、蒙古が攻めて来た

って、神風が吹いて勝ったではないか。日本は神の国だから、戦力とかも計算しないで、真珠湾攻撃であれだけの戦果を収めたから大喜びしたのでしょう。すぐにミッドウェーで海軍が全滅し、それからはずっと落ち目になってしまう時代に、私たちは子どもでしたが、巻き込まれていったわけです。

愛沢：先に述べた河野恒吉という人物は、陸軍少将でしたがのちに朝日新聞のジャーナリストになっていました。軍人であったのに新聞記者というのはちょっと不思議ですが、結構リベラリストの軍人もいて、河野恒吉は軍備縮小同志会っていうのをつくって、吉野作造や石橋湛山たちと研究会をつくって、戦争がなくなるように軍縮をやろうというような人物が館山の船形にいたのです。アメリカもそのような動きには、注目したと思われます。

また、館山が注目されたことの理由に、「館空」の赤山地下壕では、戦争中に電波傍受をしていたともいわれています。通信部隊は暗号解読をやって、早くから戦争終結の外交交渉の電報や、ポツダム宣言受託のやり取りを傍受していた可能性があります。

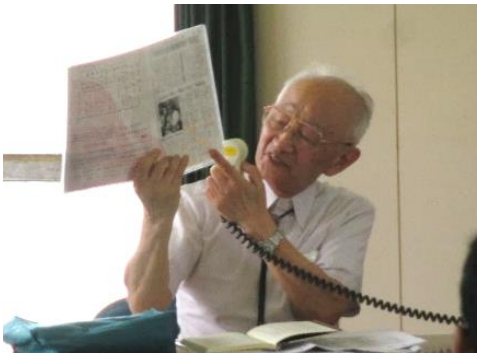


さらに梅津美治郎は7月23日に館山の赤門病院に来ていることが芳名録からわかりました。何で戦争末期に、それもポツダム会談が終わって、宣言が出される前に、館山に来たのか不思議です。推測されることは戦争終結の形を模索していた可能性があります。当時、陸軍中堅クラスの将官は本土決戦を叫んで騒いでいました。大本営はそのなかで大きく揺れ動いていました。多分、房総南部でも本土決戦を進めようとするグループが多かったかもしれません。梅津は多田などの関係者と接触し、直接、陸・海軍の状況を把握するために館山に来たのではないかと推察されます。

アメリカ軍が館山に注目したのも、軍事施設が多いことや本土決戦の動きがはっきしして最後まで抵抗するグループがいて、それがクーデター騒ぎにつながっていると見ていたからかもしれません。つまり米軍本隊の上陸地となり、すぐに直接軍政を敷かれた理由もそこにあるのではないかと考えられます。

西村：それからもう一つお話しておきたいのは、これは戦争が終わってからの話ですが、ここに9通ばかりの手紙があります。これは差出人が館山市北条鶴ケ谷だとか、船形の同級生や、税務署にいた同級生、それから八束の常光寺の安西宥範先生のものがあります。こういった友人や先生の手紙全部が下の方を破って開封し、その後にセロテープを使って閉じた形跡があります。これはインターネットから取り寄せた「米軍占領下におけるインテリの活用方法」という文章です。これはアメリカが手紙をこうして全部検閲したのです。日本の軍や軍人もやらなかったような検閲、つまり信書を開けて中身を調べたわけです。アメリカ人が調べてもわからない内容ですから、この作業のために日本のインテリと称する人たちに高給を払って東京中央郵便局の一室で手紙を開封し検閲した後に、英語で報告していたということです。これはCDDという民間検閲局がおこなっていた姿として、この手紙に残っていますので、捨てがたくて取ってあります。当時のインテリはCDDから相当お金を貰ったそうです。その人たちは後になって、ジャーナリストになって、結構良いところで仕事をしていたそうです。

質問：郵便の日付はいつですか。

西村：昭和21年から22年にかけてです。宛先も館山市那古になっていますが、大体、中央郵便局を経由したものを検閲しているようです。

愛沢：近年、NHKで取り挙げた番組がありました。告発する女性は今も自分がやったことが大変な罪であり、悩んできたとのことでした。当時の学生が金のためとはいえ、その後活躍している人物もいて、やったことを隠しているようです。アメリカの検閲は徹底していたようです。長時間でしたが、今日は西村さんから貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。